

第6章 考察

高知平野の弥生墓制

山本 純代

1. はじめに

奥谷南遺跡Ⅱ区の調査では、標高58mの尾根頂上部を中心とした500平方メートル程の域内で、切り合ひ関係のない6基の土壙墓と1基の土器棺墓を検出した。出土した土器はすべて南四国の弥生後期終末のヒビノキⅡ式土器である。

高知県における弥生時代の研究は、80年代以降大規模調査の増加による資料の蓄積により土器編年や集落構造などの研究は飛躍的な進歩を見ている。しかしながら、こと墓制については良好な資料を欠き本格的な研究は皆無に近い状態である。ここでは今次調査を期にこれまで散発的に検出されている墓に関する資料を紹介し若干の考察を試みたい。

2. 弥生時代前期

①田村遺跡群⁽¹⁾

弥生時代最古の集落であるLoc.16、17から壇棺墓、土壙墓が確認されている。Loc.16、17を中心とする集落は物部川の自然堤防上に形成され、堅穴住居と掘立柱建物が馬蹄形状に配され、中央部に広場を持つ。墓は広場の部分から検出されている。

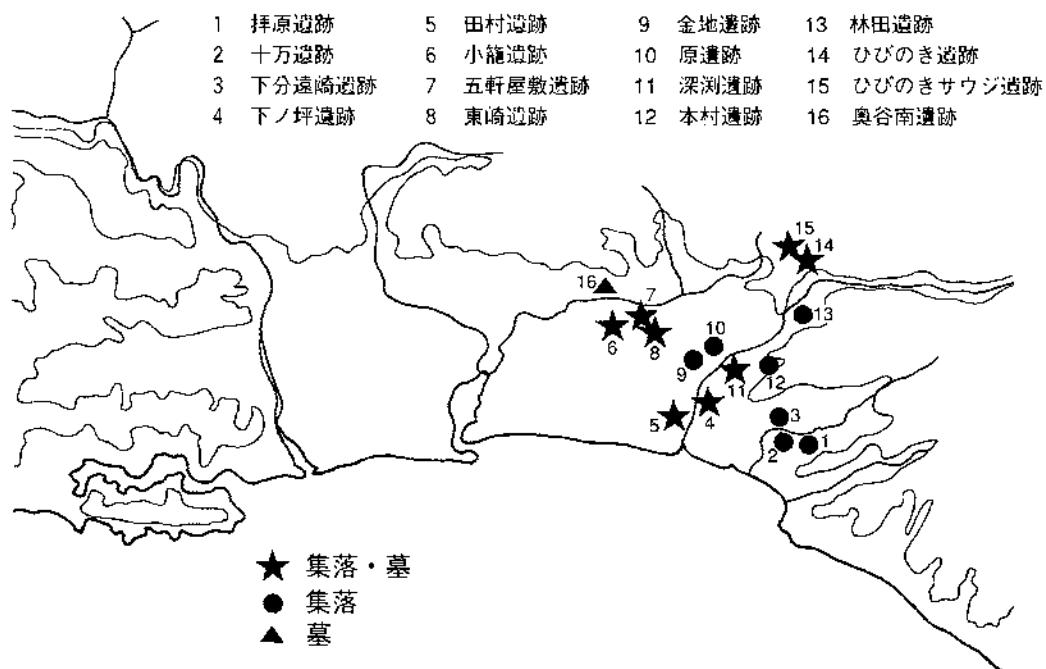


Fig.93 高知平野の弥生時代集落遺跡及び墓

(a)壺棺墓

SK 4 は楕円形を呈し、長軸1.41m、短軸1.01m、深さ35cmを測る。棺身と思われる大型壺(7)は下胸部を底面にへばり付け、上腹部と口縁部を内部に崩れ落とした状態で出土している。器高67.8cm、最大径67.8cm、口徑43.8cmを測る。他に壺(1・2)、底部(3~6)、土器片転用の紡錘車(8)も出土している。前期Ⅰ期の幼児墓と考えられる。

(b)土壙墓

Loc.16から2基(SK 6・SK 7)、Loc.17から3基(SK 1・SK 4・SK30)計5基の土壙墓が確認された。

- ・ SK 6 はやや乱れた長方形を呈し、長軸3.19m、短軸0.92m、深さ0.35mを測る。壺(16~18)、甕(19~36)、鉢(37)、紡錘車(32)、搬入品の石包丁(37・38)、軽石(33~36)、特殊な大きさの管状(31)が出土している。出土遺物から前期Ⅰ期の成人墓と考えられる。
- ・ SK 7 は長方形を呈し長軸2.17m、短軸1.12m、深さ0.27mを測る。出土遺物はほとんどないが、燐分析の結果埋土中に多くの燐が含まれており埋土検出面よりSK 6と同時期前期Ⅰ期の成人墓と考えられる。
- ・ SK 1 は不整方形を呈し、長軸2.90m、短軸0.7m、深さ0.26mを測る。底部破片2点(39・40)が出土している。
- ・ SK 4 は不整方形を呈し、長軸2.90m、短軸0.65m、深さ0.18mを測る。弥生土器が多数(41~46)出土している。
- ・ SK30は長方形を呈し、長軸2.05m、短軸1.30m、深さ0.23mを測る。10数点の弥生土器片(47)が出土している。

これら3基はやはり前期Ⅰ期と考えられる。

②海岸砂丘^②

田村遺跡群の南に位置する海岸砂丘上で前期新段階の底部穿孔小壺が土砂採集の折、表採されている。墓の供獻用土器と思われる。

3. 弥生時代中期

弥生時代中期前半になるとそれまで自然堤防上を転々と拡散していた集落遺跡数は減少に転じる。そしてIV様式段階になると田村遺跡での墾穴住居址数が一気に増大するとともに周辺部にも小集落が拡大していく。しかし墓の発見例は僅少である。かつて土壙墓とされていたもの(進入灯)は溝状土壙とされ生活関連遺構として位置づけられている^③。

①田村遺跡群田中地区(進入灯)^④

木棺墓の可能性のある土壙墓1基と壺棺墓1基が確認されている。

(a)土壙墓

- ・ SK21は長方形を呈し長軸2.55m、短軸0.9m、深さ62cmを測る。南壁及び東壁は2段に掘られている。出土遺物は叩石と少量の弥生土器片である。中期後半の木棺墓の可能性のある土壙である。

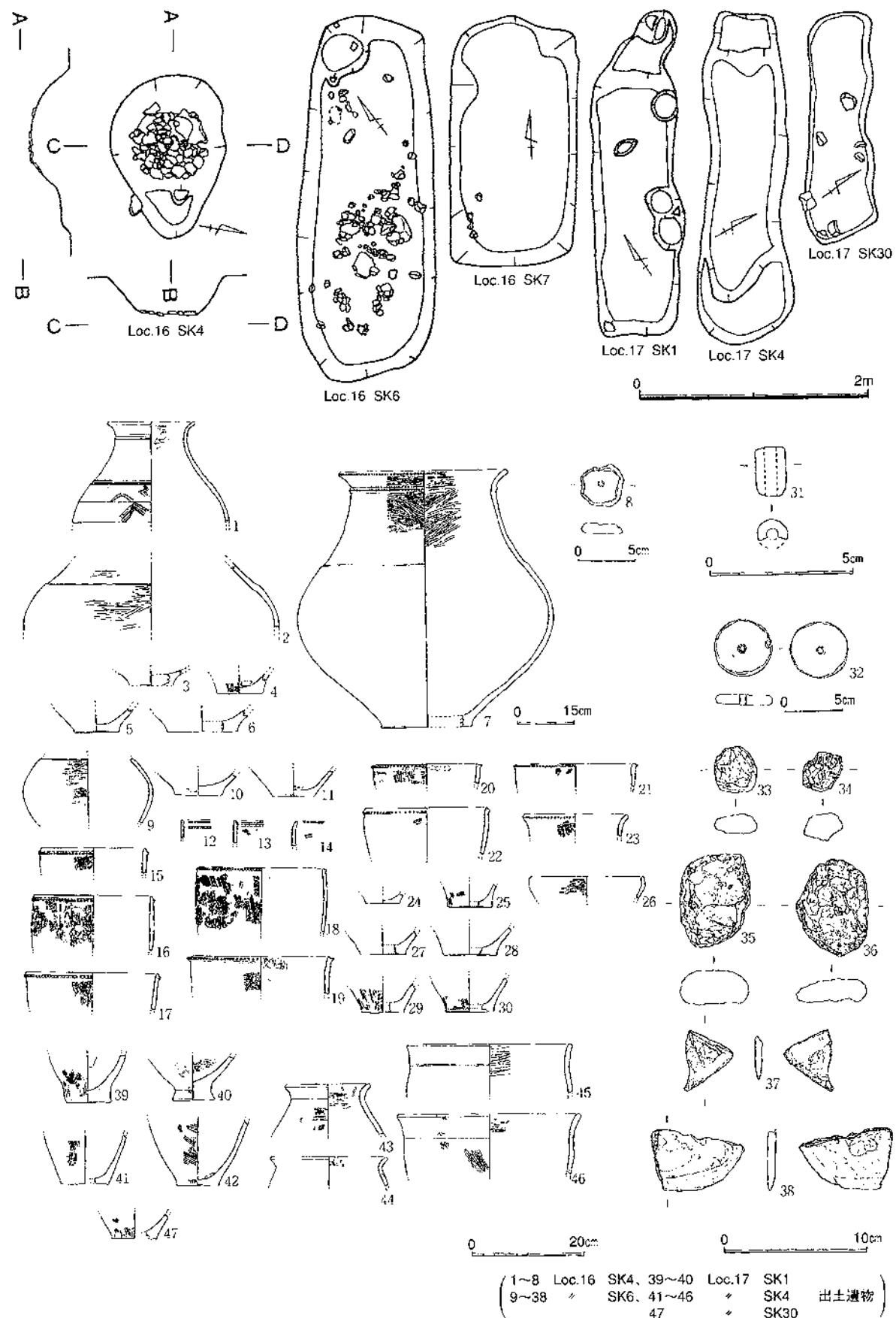


Fig.94 弥生時代前期 田村遺跡

(b)壺棺墓

- ・SK9は楕円形を呈し長軸76cm、短軸56cm、深さ8cmを測る。壺棺が押しつぶされたような状態で出土している。残存器高25.2cm、底部径8.4cm、残存最大径33.2cmを測る、中期の壺棺墓である。

②永田遺跡⁽⁵⁾

永田遺跡は長岡郡本山村にあり四国最大の吉野川流域の河岸段丘上に位置する。周辺部では弥生時代終末の集落址が多数確認されている。永田遺跡は中期末から古墳時代前期初頭まで継続して営まれる集落址の可能性が指摘されている。

(a)土壙墓

- ・SK11は長楕円形を呈し、長軸1.6m、短軸0.64m、深さ45cmを測る。出土遺物は壺口縁部、同胴部、高杯脚部、打製石包丁である。中期末葉の土壙墓と考えられる。

③トリアサリ遺跡⁽⁶⁾

トリアサリ遺跡は南国市十市の海岸砂丘上に位置する。土砂採集の折、凹線文段階の底部穿孔小壺が表採されている。先述した前期のものと同形態の供獻用土器と考えられる。

4. 弥生時代後期

弥生時代後期になると遺跡数が増大し、それに照応して墓の検出例も増加する傾向に在り、方形周溝墓、土壙墓、壺棺墓、木棺墓等、その種類も豊富になる。

①小籠遺跡⁽⁷⁾

小籠遺跡は南国市岡豊町小籠に所在し、旧物部川によって形成された更新世の扇状地である長岡台地の先端部に位置する。弥生時代前期末に成立し古墳時代、中近世と多岐な時代にわたって営まれた遺跡である。弥生時代後期初頭の方形周溝墓1基と土壙墓が確認されている。

(a)方形周溝墓

- ・SX1は1辺5.2m、幅1.2m、深さ10cm前後を測る溝状の遺構が北と東を逆L字状に巡り、西側にも確認延長3.5m、幅60~120cm、深さ10cmの溝状遺構が位置している。南側は調査外のため明らかになし得ないが、同様に巡っている可能性がある。弥生時代後期前半の細頸壺が出土しており底部穿孔の供獻用の壺の可能性がある。マウンドや主体部は削平を受けたものとされる。

(b)土壙墓

- ・SK18は楕円形を呈し、長軸3m、深さ20cmを測る。3分の1程度が調査区外に出ている。出土遺物は鉢と壺である。弥生時代後期前半の土壙墓である。この他にSK18と同様の埋土を持つ土壙が数基検出されている。報告者は遺物がないところから土壙の性格について保留しているが同時期の土壙墓となる可能性がある。

②下ノ坪遺跡

下ノ坪遺跡は香美郡野市町に所在し、物部川左岸の野市台地の西端にある沖積平地上にある。弥生時代から古墳時代の集落である。県内で確認されている内、最も古い時期のものである壺棺墓2

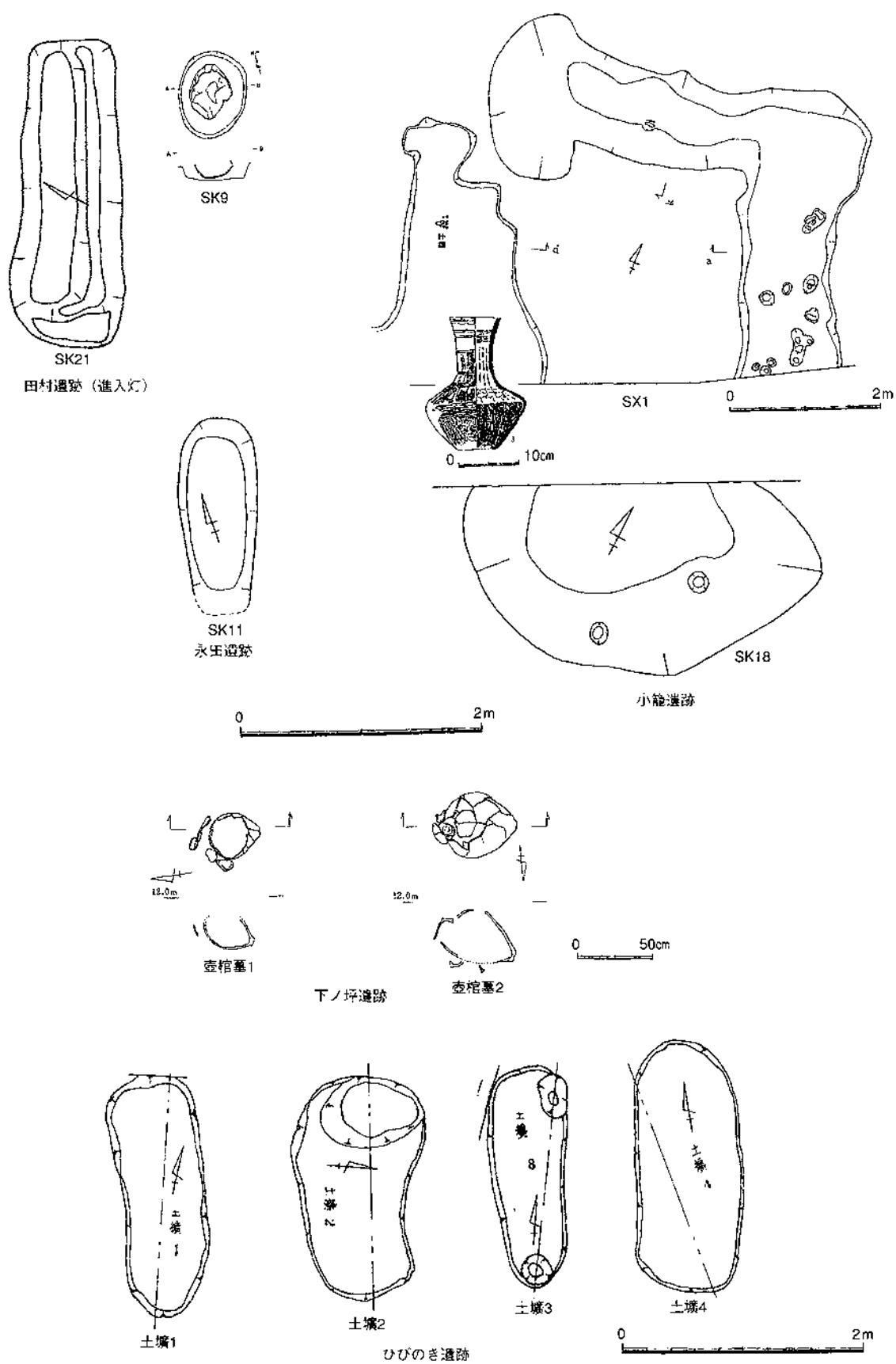


Fig.95 弥生時代中期（田村遺跡、永田遺跡）・弥生時代後期（小籠遺跡、下ノ坪遺跡、ひびのき遺跡）

基が確認されている。

(a)壺棺墓

- ・壺棺1は高さ40cm以上、最大径42cmの壺で埋置方向は南北で据置角度は27°である。蓋として用いられたと思われる壺口縁部と、壺棺内より壺が検出している。
- ・壺棺2は高さ60cm以上、最大径42cmの壺で埋置方向は東西、据置角度は30°である。蓋として用いられたと思われる壺底部と、壺棺内より蓋に使われた壺の口縁部と、棺外より壺棺の口縁部が出土している。壺棺1・2ともに後期Iに属する。

③ひびのき遺跡⁽⁸⁾

ひびのき遺跡は香美郡土佐山田町百石町ヒビノキに所在する。長岡台地上に広がる弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落遺跡である。土墳墓4基が確認されている。

(a)土墳墓

- ・1号土墳はほぼ楕円形を呈し長軸2.4m、短軸0.8mを測る。床面には栗石が敷かれており、この床面より高杯脚と壺底部が出土した。
- ・2号土墳墓は楕円形を呈し長軸2m、短軸0.8m、最大幅1mを測る。床面には10×14cm大の栗石が敷かれ、この上から底が故意に破壊された痕跡の見られる底部近くの破片が出土している。
- ・3号土墳墓は楕円形を呈し、長軸1.9m、短軸0.7mを測る。床面には栗石と割石が敷かれており、その上から穿孔らしき痕跡のある壺底部が出土している。
- ・4号土墳墓は楕円形を呈し長軸2.4m、短軸0.9mを測る。床面には9×12cm大の栗石が敷かれている。遺物は全くなかった。これら4基の土墳墓は弥生時代後期中葉の土墳墓である。

④土佐国衙跡⁽⁹⁾

土佐国衙跡は南国市比江に所在し、国分川北岸の扇状地で南に広がる平野を一望できる地にある。弥生時代終末期の木棺墓及び土墳墓2基が確認されている。

(a)木棺墓

- ・SK79は舟形を呈し長軸2.55m、短軸0.8m、深さ42cmを測る。2段掘りとなっており、底面より1段上がった平場の北側と南側に側石を配し、東端に人頭大の川原石が置かれている。壺口縁部の破片が出土している。弥生時代終末期の木棺墓と考えられる。

(b)土墳墓

- ・SK80はほぼ方形を呈し長軸2.3m、短軸0.88m、深さ18cmを測る。底面にピット4個が確認されている。出土遺物は外面にタタキ目を存する壺の細片1点のみである。
- ・SK81は舟形を呈し長軸1.5m、短軸0.4m、深さ9cmを測る。舟形を呈し長軸2.0m、短軸0.4m、深さ9cmを測る。出土遺物は皆無に等しい。弥生時代終末期の土墳墓と考えられる。

⑤五軒屋敷遺跡⁽¹⁰⁾

五軒屋敷遺跡は南国市東崎に所在し旧物部川の古扇状地である長岡台地の西寄りに位置している。弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭の集落及び弥生時代後期終末の墓墳群が確認されている。

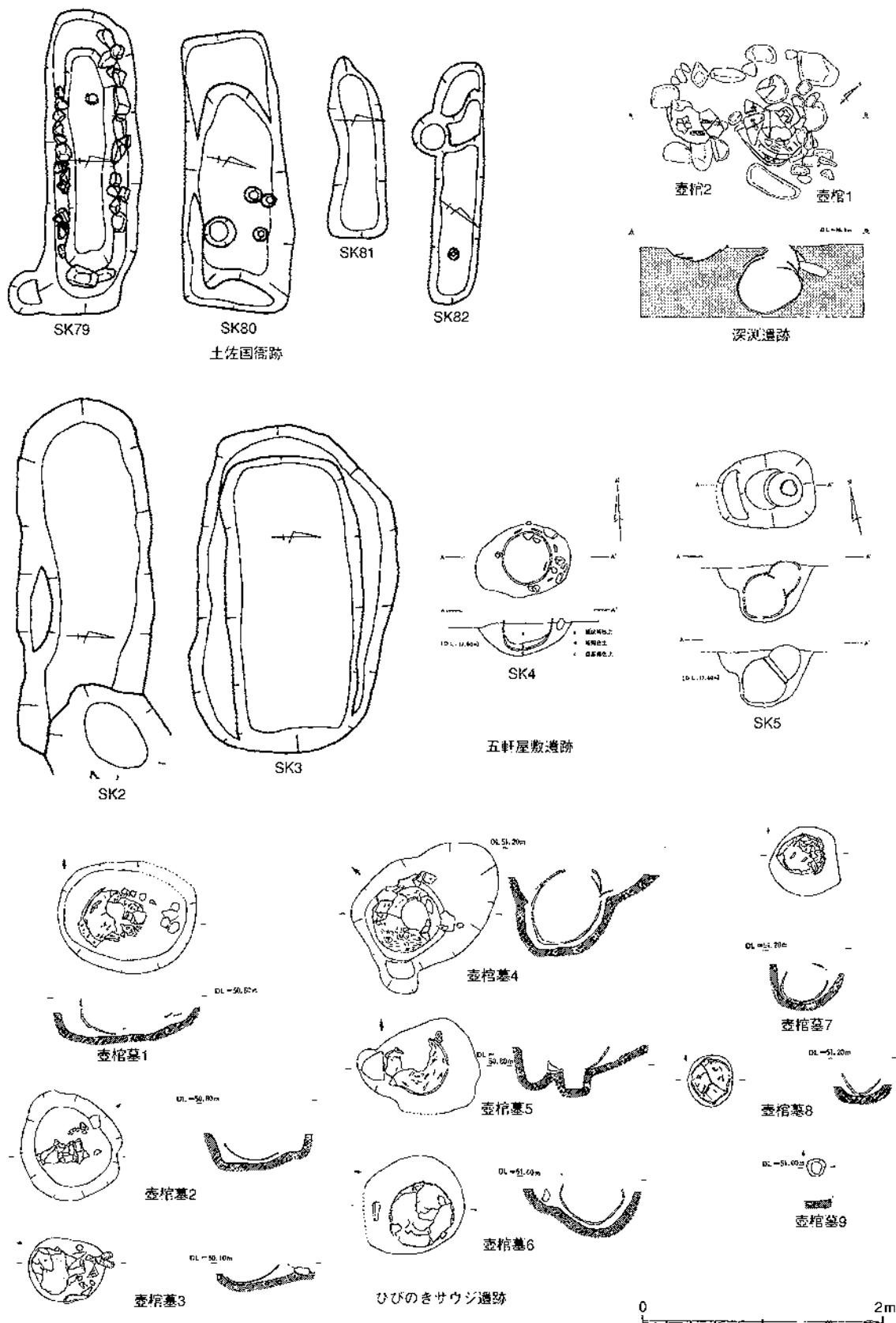


Fig.96 弥生時代終末（土佐国衙跡、深渕遺跡、五軒屋敷遺跡、ひびのきサウジ遺跡）

(a)上壙墓

- ・SK 2 は長軸2.4m、短軸1.1m、深さ36cmを測る。二重口縁の壺型土器口縁部が出土している。
- ・SK 3 は長軸2.74m、短軸1.65m、深さ62cmを測り、段掘りになっている。出土遺物は供獻用と考えられる壺型土器と甕型土器である。SK 2、3 共に弥生時代終末期の成人用の上壙墓であると考えられる。

(b)壺棺墓

- ・SK 4 は梢円形を呈し長軸73cm、短軸61cmで深さ24cmを測る。埋置方向はほぼ東西で据置角度は42°である。大型の壺型土器を棺身としており残存器高41.2cm、口径44.4cm、底径7.4cmを測る。
- ・SK 5 は梢円形を呈し長軸83cm、短軸53cm、深さ43cmを測る。明確な段掘りが見られる。埋置方向はほぼ東西で据置角度は46°である。残存器高38.0cm、口径38.2cm、底径7.4cmの壺を棺身として使用し、蓋として使用された甕も出土している。これら2基は弥生時代後期終末の壺棺墓であると考えられる。

⑥深渕遺跡⁽¹⁾

深渕遺跡は香美郡野市町に所在し、物部川河口から3kmほど上流に上った東岸に位置する。縄文時代晩期末から弥生時代、古墳時代中期、後期、古代、中世と多岐な時代にわたって生活が営まれていた。弥生時代終末の壺棺墓2基が確認されている。

(a)壺棺墓

- ・壺棺1は墓壙の平面形及び掘り方は確認されていない。壺棺は複棺（覆口式）で上壺の底部は後世の削平によって大部分が欠損している。下壺は上部3分の1程度を打ち欠いており、埋置方向はほぼ北向きで据置角度は27°である。上壺は口径32.4cm、残存器高27.2cm、下壺は残存器高55.2cm、最大径53.6cmを測る。その他に下壺を留めるように底部の破片が分散して出土している。
- ・壺棺2は削平を受けており残存状態は不良であった。墓壙の平面形及び掘り方は確認されていない。上壺に用いられたと思われる物は口径32cm、残存器高36cmを測り、下壺と思われる物は残存高44cm、最大径43.2cmを測る。これら2基は弥生時代終末期の壺棺墓と考えられる。

⑦ひびのきサウジ遺跡⁽²⁾

ひびのきサウジ遺跡は香美郡土佐山田町に所在し、県下三大河川の1つである物部川西岸の河岸段丘上に位置する。弥生時代後期終末から古墳時代にかけての大規模な集落址で、壺棺墓9基が確認されている。SK 8、SK 12はやや離れたところに位置するが、それ以外は南北7m、東西6mくらいの範囲で群を形成している。

(a)壺棺墓

- ・壺棺墓1は複棺（覆口式）で墓壙は梢円形を呈し長軸1.1m、短軸0.81m、検出面からの深さ20.0～31.5cmを測る。埋置方向はほぼ東向きで据置角度は67.0°である。壺棺は削平を受けており、残存状態は不良であったが下壺は残存高34.8cm、残存径61.2cm、上壺と考えられるものは残存高7.4cmを測る。

Tab.40 高知平野の弥生墓一覧表

時代	遺構	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面形	方位	角度	遺物
田村遺跡群loc16								
弥生前期前半	SK6(土墳墓)	3.19	0.92	0.35	不整方形	N 43° E		壺、甕、鉢、纺錘車、石包丁、管玉、蛭石
	SK7(土墳墓)	2.17	1.12	0.27	長方形	N 4° E		細片数点のみ
	SK4(壺塚墓)	1.41	1.01	0.35	楕円形	N 81° E		大型壺、壺、底部、上器片転用の纺錘車
田村遺跡群loc17								
弥生前期前半	SK1	2.9	0.7	0.26	不整方形	N 38° E		
	SK4	2.9	0.65	0.18	不整方形	N 56° W		
	SK30	2.03	0.5	0.23	菱方形	N 55° W		
田村遺跡田中地区(進入丸)								
弥生中期後半	SK9(壺塚墓)	0.76	0.56	0.8	楕円形	N 81° E		
	SK21	2.55	0.9	0.62	長方形	N 62° S		叩石、弥生土器細片
永田遺跡								
	SK11	1.6	0.64	0.45	楕円形	N 20° E		壺口縁部、頸部、高杯脚、打製石包丁
小籠遺跡								
弥生後期前半	SK18(土墳墓)	3	不明	0.2	楕円形	東西		鉢、壺
弥生後期初頭	SX1(方形周溝墓)	5.2	1.2	0.1前後	-			後期初頭(後期Ⅰ期)細頭壺
下ノ坪遺跡								
弥生時代後期	壺塚墓1	0.4以上	0.42	(0.24)	-	南北	27°	蓋として用いられた壺口縁部、壺
	壺塚墓2	0.6以上	0.42	(0.36)	-	東西	30°	蓋として用いられた壺底部、口縁部
ひびのき遺跡								
弥生後期中葉	1号土坑	2.4	0.8	-	はす箱円形	主軸南北		壺、高杯
	2号土坑	2	0.8	-	-	主軸東西		弥生土器片
	3号土坑	1.9	0.7	-	楕円形	主軸南北		壺底部(穿孔あり)
	4号土坑	2.4	0.9	-	楕円形	主軸南北		なし
五軒屋敷遺跡								
弥生後期終末	SK4(壺塚墓)	0.73	0.61	0.24	楕円形	N 76° E	42°	
	SK5(壺塚墓)	0.83	0.53	0.43	・	N 76° W	46°	
	SK2(土墳墓)	2.4	1.1	0.36	・	N 90° W		壺形土器
	SK3(土墳墓)	2.74	1.65	0.62	長方形	N 80° W		壺形土器、甕形土器
土佐岡衛跡								
弥生後期終末	SK79(木棺墓)	2.55	0.8	0.42	舟形	N 80° E		壺口縁部
	SK80(・)	2.3	0.88	0.8	方形	N 78° E		甕細片
	SK81(土墳墓)	1.5	0.4	0.09	舟形	N 87° E		
	SK82(・)	2	0.4	0.09	舟形	N 61° E		
	SK83(・)	1.36以上	0.58	0.2	舟形	N 60° E		弥生土器細片
深瀬遺跡								
弥生時代後期終末	壺塚1	(0.58)	(0.52)	(0.57)	-	ほぼ北向き	27°	
	壺塚2	(0.49)	-	(0.12)	-	不明	不明	
ひびのきサウジ遺跡								
弥生時代終末	SK8(壺塚墓1)	1.1	0.81	0.2~0.32	楕円形	N 84° E	67°	
	SK12(壺塚墓2)	0.93	0.82	0.15~0.25	楕円形	N 90° E	不明	焼成後に1孔を穿った底部
	SK19(壺塚墓3)	0.65	0.53	0.09	楕円形	N 2.5° W	31.5°	
	SK21(壺塚墓4)	1.27	0.93	0.18	不整形	N 77° W	32.7°	
	SK22(壺塚墓5)	0.78	0.755	0.22	不整形	N 38° W	46.7°	
	SK20(壺塚墓6)	0.92	0.79	0.3	楕円形	N 72.5° W	4°	
	SK23(壺塚墓7)	0.675	0.575	0.39	円形	N 72° W	62.5°	
	SK24(壺塚墓8)	0.43	0.38	0.85	楕円形	N 10.2° E	8.5°	
	SK32(壺塚墓9)	0.28	0.25	0.2	円形状	ほぼ北向き	不明	
長歛遺跡								
	SK2	2.17	1.2	0.52	不整方形	N 19°30' E		細縫の壺形土器
長歛古墳群								
	SK1	1.8	0.72	0.11	方形	N 27°47' W		
	SK2	2.35	-	0.28	方形	N 33°9' E		
	SK3	2.05	1.04	0.34	隅丸方形	N 56°3' W		
	SK4	1.42	0.6	0.12	方形	N 58°12' E		

- ・壺棺墓2は残存状態は不良であるが、墓壙は楕円形を呈し長軸0.93m、短軸0.82m、検出面からの深さ14.5~24.5cmを測る。埋置方位は北向きの可能性があり据置角度は不明である。壺棺は残存高14.8cmを測り、底部には焼成後1孔を穿つ。
- ・壺棺墓3の墓壙は楕円形を呈し、長軸0.65m、短軸0.53m、検出面からの深さ9.0cmを測る。残存状態は不良である。埋置方向はほぼ南向きで据置角度は31.5°である。壺棺は残存高30.8cm、残存径52.8cmを測る。二重口縁壺の口縁が出土し、壺棺墓9出土の物と接合できたが壺棺に伴うかどうか不明である。
- ・壺棺墓4は複棺(覆口式)で残存状態は良好である。墓壙は不整形を呈し長軸1.27m、短軸0.93m、検出面からの深さ61cmを測る。埋置方向はほぼ東向きで据置角度は32.7°である。下壺は頸部及び口縁部を意識的に打ち欠いておるものと見られ、胴上端部も打ち欠いて壺に貼り付けるように置いてある。残存高70cm、最大径54.4cmを測る。上壺は残存径47.2cm、最大径44.4cmを測り、下壺同様埋葬時に打ち欠きながら下壺とあわせていったと考えられる。
- ・壺棺墓5の墓壙は不整形を呈し長軸0.78m、短軸0.755m、検出面からの深さ22cmを測る。埋置方向はほぼ東向きで据置角度は46.7°である。残存状態は不良である。壺は残存高50.8cm、最大径48.8cmを測る。又、鉄製鎌の可能性の有る鉄器が壺棺埋土から出土しているが壺棺に伴うものかどうかは不明である。
- ・壺棺墓6は複棺(覆口式)で残存状態は不良である。墓壙は楕円形を呈し長軸0.92m、短軸0.79m、検出面からの深さは30.0cmを測る。埋置方向はほぼ垂直で据置角度は4°である。下壺残存高42.8cm、最大径54.8cmを測り埋土中には上壺と思われる鉢の破片が入っていた。
- ・壺棺墓7は複棺(覆口式)で残存状態は不良である。墓壙は東北側が柱穴に切られているが、円形を呈すと考えられる。長軸は0.675mまで確認でき、短軸0.575m、検出面からの深さ38.5cmを測る。埋置方向はほぼ東北向きで据置角度は62.5°である。下壺は残存高39.6cm、最大径33.2cmを測る。
- ・壺棺墓8の墓壙は円形を呈し長軸0.43m、短軸0.38m、検出面からの深さ8.5cmを測る。埋置方向はほぼ東向きで据置角度は8.5°である。残存状態は不良である。壺は残存高25cm、最大径36.8cmを測る。
- ・壺棺墓9は残存状態が不良で僅かに1部が残るのみである。墓壙は円形状であったと考えられ長軸0.28m、短軸0.25m、深さは2.0cmを測り基底部のみの残存である。埋置方向はほぼ北向きで据置角度は不明である。これら9基はすべて弥生時代終末期の壺棺墓である。

5.まとめ

以上、高知平野の弥生墓を列挙してみた。高知平野において前期は集落の中央に小児用壺棺墓と成人用土壙墓を用いて埋葬していた。縄文時代より集落の中央部に墓域を設ける事が行われており、この時期は土器や集落の構成においても縄文から弥生への移行期であり、墓制においても縄文的なものを残しているのかもしれない。また、海岸砂丘上に埋葬される例も見られる。

中期前半の事例についてはほとんど不明である。田村遺跡においても集落規模が極端に減少し、

周辺部の遺跡においても当該期の集落の実態はほとんどわかっていない。このことと照応した現象であろう。ただ、南国市岡豊町に存する長畝古墳群⁽¹³⁾の西側尾根上の長畝遺跡で、弥生時代中期の細頸の壺形土器を伴う土壙が確認されている。墓壙であるかは不明であるが尾根上を何らかの形で使用することが始まっていると想定できる。

凹線文土器の定着し始める中期末からは堅穴住居などの遺跡が増加しはじめ、後期にかけては再び活況を見せるようになる。田村遺跡においては400棟近い堅穴住居址が確認される⁽¹⁴⁾など拠点的集落としての様相を整えはじめる。周辺部においても小籠遺跡、下ノ坪遺跡等この時期から始まる新興集落というべき集落が出現するようになり、南四国の弥生社会は新たな展開を見せるようになる。しかしながら墓制については必ずしもこの様な集落動向に呼応する顕著な動きを認めることはできない。まず田村遺跡においては集落内に数基の小児用壺棺、成人用土壙墓、成人用木棺墓と考えられるものが認められる程度である。おそらく周辺部、丘陵状などに墓域が形成されていたのであろう。ただ、新しい動きが全くないわけではない。小籠遺跡では後期初頭の方形周溝墓と他の上壙墓が確認されており、墓域の存在が示唆される。それまで本県では方形周溝墓の出現期は西分増井遺跡等、古墳時代初頭とされてきた⁽¹⁵⁾。またその立地も集落の中であり墓域を形成してはいない。小籠遺跡の調査により本県の方形周溝墓の出現期が後期初頭まで遡り得た。

後期後半になるとこれまで拠点的集落であった田村遺跡が突然解体をはじめる。と同時に標高の高い内陸の平野部や物部川をはじめとする主要河川の中流域に数多くの集落が出現するという注目すべき動きが見られる。この変化と連動する形で墓制にも新しい動きが見られ画期を見せる。この時期最も多いのは集落の中に存する壺棺墓で、これらは幼児用のみで成人用のものはない。次に土壙墓と木棺墓がやはり集落内で見られる。そして奥谷南遺跡では丘陵上という集落とは隔絶された場所で成人用の墓域を確認し得た。これは一般成員とは墓制を異にする被葬者集団の存在を想定させる。又、墓壙の形態も県内には類例を求められないものであり、弥生時代終末期における本県の墓制を考える上で貴重な資料となった。なお前述した長畝古墳群は奥谷南遺跡に隣接する西方400mの尾根上にある。この内尾根頂上部で確認された7基の土壙群は、出土遺物が皆無である為時期は確定できないが、報告者は弥生時代ないし古墳時代はじめの土壙墓の可能性を指摘している。長畝遺跡の例とあわせ、奥谷南遺跡との比較の上で興味深い資料である。集落と隔絶した場所に墓域を設ける行為が中期或いはそれ以前からの伝統的な有り様であるのか、新しい動きであるのかは今後の課題である。

以上、高知平野の弥生墓制について集成してみた。筆者の力不足で考察するには至らず、また他地域の様相も網みきれず比較も充分できなかった。今後の県下の資料の累積を待つと共に、小文が研究の一助となれば幸いである。尚、お忙しい中、県内の古墳を案内してくださった広島県埋蔵文化財センターの三好和弘氏、及び府中市教育委員会の岡田容子氏及び諸氏、香川県埋蔵文化財センターの片桐孝浩氏、蔵本晋司氏、御助言下さった高知県埋蔵文化財センターの出原恵三氏、松村信博氏、池澤俊幸氏、久家隆芳氏他、諸氏に記して感謝いたします。

〈註〉

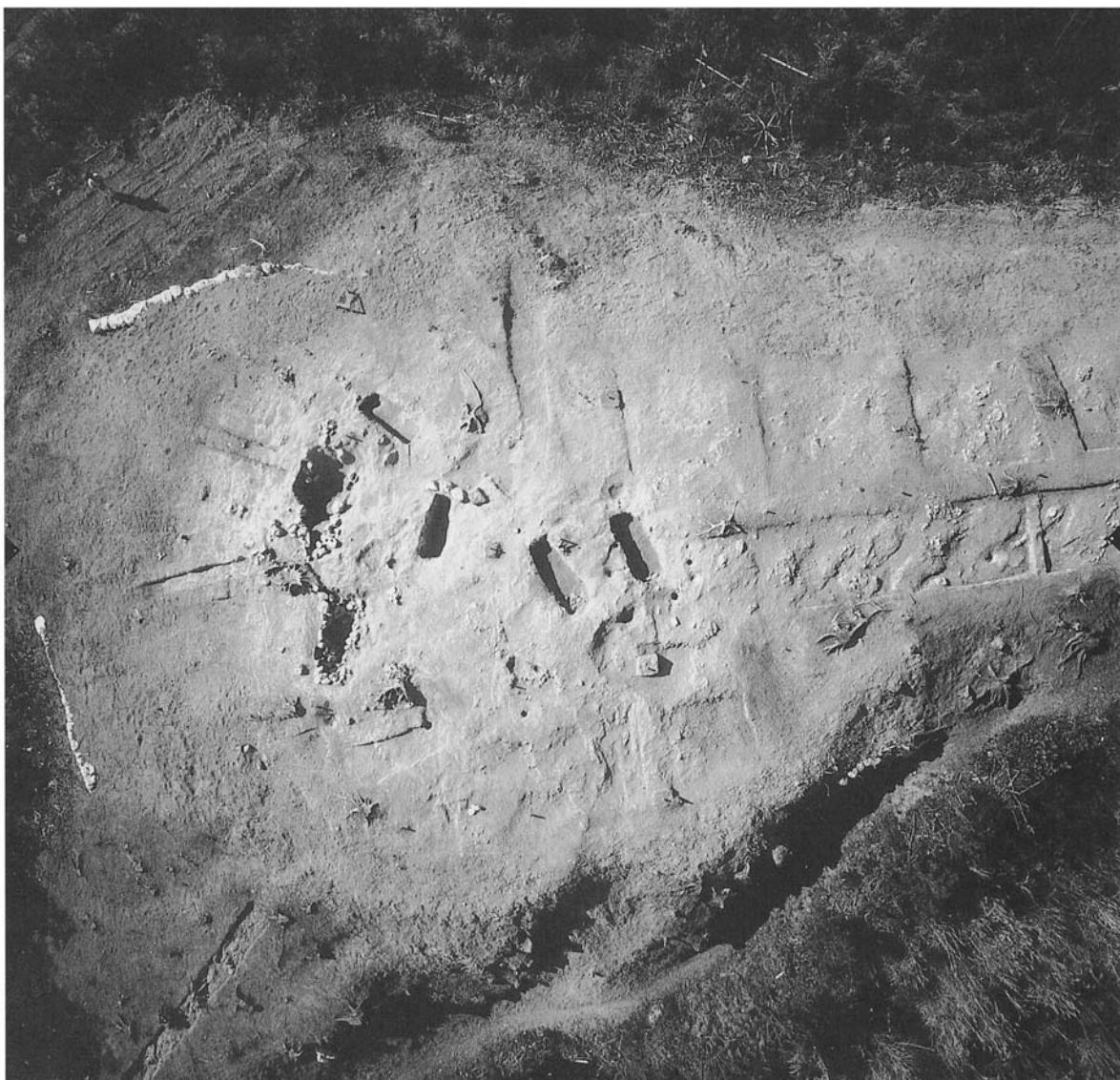
- (1)森田尚宏：『Loc.16』『高知空港拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第2分冊高知県教育委員会 1986年
- 下村公彦：『Loc.17』『高知空港拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第2分冊高知県教育委員会 1986年
- (2)採集資料が南国市教育委員会の中にある。
- (3)小松大洋：『農業農村活性化農業構造改善事業上間地区区画整理に伴う発掘調査報告書 下ノ坪遺跡Ⅱ』野市町教育委員会 1998年
- (4)出原恵三：『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（山側進入灯設置区域）報告書 田村遺跡群田中地区』高知県教育委員会 1986年
- (5)出原恵三・佐竹寛・藤方正治：本山町埋蔵文化財調査報告書第7集『永田遺跡』本山町教育委員会 1995年
- (6)出原恵三氏の街教示による。
- (7)出原恵三・泉幸代・浜田恵子・藤方正治・行藤たけし：『あけばの道路建設工事に伴う発掘調査報告書小籠遺跡・Ⅲ』(財)高知県埋蔵文化財センター 1997年
- (8)岡本建兒・廣田典夫：『ひびのき遺跡』高知県土佐山田町教育委員会 1977年
- (9)廣田佳久『土佐国衝跡発掘調査報告書第9集－金谷地区の調査』高知県教育委員会 1989年
- (10)角谷和生・下村公彦：『五軒屋敷遺跡発掘調査報告書』高知県教育委員会 1984年
- (11)吉原達成・高橋啓明・出原恵三：『深瀬遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1989年
- (12)高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』上佐山田町教育委員会 1990年
- (13)廣田佳久・池澤俊幸：『高知自動車道（南国～伊野）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 長畠古墳群』(財)高知県埋蔵文化財センター 1996年
- (14)平成10年度高知空港発掘調査 田村遺跡群 現地説明会資料 1999年
- (15)出原恵三：『西分増井遺跡群発掘調査報告書』春野町教育委員会 1990年

〈参考文献〉

- ・『門田遺跡群A地点・東横木山遺跡群A地点見学会資料』(財)高知県埋蔵文化財センター 1997年10月4日
- ・片桐孝浩・信里芳紀『弥生時代の墓制について－越ノ口遺跡の事例を中心にして－』【財】香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要VI 拔刷 (財)香川県埋蔵文化財センター 1998年
- ・真鍋昭文・中野良一・沖野信一・多田仁・伊藤直子・丹下友紀子・坂口隆：『埋蔵文化財発掘調査報告書 第58田町3丁目遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財センター 1995年
- ・岡内三眞・河野雄次・北條芳隆・橋本達也・中村豊：『庄・蔵本遺跡1－徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査－』徳島大学埋蔵文化財調査室 1998年
- ・森清治：『鳴門市埋蔵文化財調査報告1 桧はちまき山遺跡・桧丸山遺跡・桧寺前谷川遺跡』鳴門市教育委員会 1994年
- ・正岡睦夫：『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告115 前山遺跡・鎌戸原遺跡 国道429号線改良に伴う発掘調

査1】岡山県教育委員会 1997年

- ・樋真治：「第回章まとめ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告87 みそのお遺跡』岡山県教育委員会 1993年
- ・出原恵三・池澤俊幸・小松大洋・行藤たけし：『農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理に伴う発掘調査報告書 下ノ坪遺跡Ⅰ』野市町教育委員会 1997年
- ・出原恵三：『弥生から古墳へ 前期古墳空古地帯の動向』『考古学研究158号』 1993年
- ・田代克己：『墓制』『季刊考古学第23号』 雄山閣 1988年
- ・金闇惣・佐原真：『弥生文化の研究8 祭と墓と装い』 雄山閣 1987年
- ・中村健二：『本州西半と四国の縄文時代墓地』『考古学ジャーナル No.422』 ニューサイエンス社 1997年
- ・岡本孝之：『弥生時代墓制の地域区分』『考古学研究165号』 考古学研究会 1995年
- ・網野善彦・大塚初重・森浩・監修：『シンポジウム「日本の考古学」弥生時代の考古学』 学生社



奥谷南遺跡Ⅱ区全景（上空から）